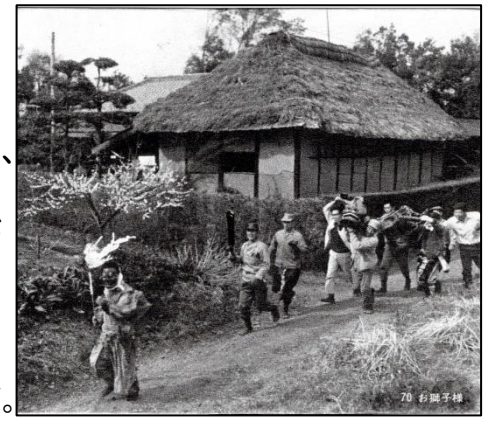
春岡村の伝説



春岡村の三月＜悪疫祓いのお獅子様（丸ヶ崎）＞

３月１０日、丸ヶ崎の氷川神社の境内にある八雲神社に丸ヶ崎の村人たちが集まります。神官による祈祷の後、大きな獅子頭を担いだ若者たちが「わあー、わあー」と声をあげながら出発します。先頭は御幣をかかげた天狗です。そのあとを剣持、獅子、世話役が続きます。丸ヶ崎村の菩提寺である多聞院の過去帳によると…「天保元年（1829）死者４４名。うち成人２４名、幼童は２０名」当時の丸ヶ崎村の戸数は８０余りなので、２軒に１人死者を出したことになります。そして続く天保２、３、４年にも幼童３３人が亡くなっています。その死因は赤痢、疫痢をはじめとした伝染病によるものと思われます。そんな中、多聞院の住職は村の若者たちと相談し、獅子邑回し（ししむらまわし）で悪疫から村人を救おうと考えたのかもしれません。

さて、氷川神社を出発した獅子は、まず本村と呼ばれるところ（１６号の向こう側、アクアステージ２１の裏あたり）に行きます。「わぁーわぁー」と声をあげながら、土足のまま各家の土間から座敷に一挙に乗り込み、家人の頭だけでなく部屋中を獅子の口をパクパクさせて悪疫を退散させます。このとき天狗はすでに次の家に向かっています。天狗は子どもを見つけるとさらっていこうとするので、子供たちは天狗が恐くて怖くて逃げ回ります。かつては若い娘や嫁達も追いかけ回したそうです。

本村の最後の家を祓い終えると、見沼代用水の堤を、威勢をあげながら深作村の境まで行って悪疫を深作へ追い払います。そして、見沼代用水にかかる旧出戸橋まで舞い戻ると、橋の上で獅子頭を中原・有無地区に引き継ぎます。ここでも同じように家々を回った後、瓦葺との境で悪疫を瓦葺に追い払い、宮前橋の上で丸ヶ崎新田に引き継ぎます。

この頃には、すでに日が傾きかけています。丸ヶ崎新田の家を一軒一軒回った後、日も暮れ暗い中、綾瀬川にかかる高野橋から岩槻の平林寺の方へ「わぁーわぁー」と悪疫を祓います。このあと丸ヶ崎の氷川神社に戻り、天狗の面や獅子頭、衣装などを八雲神社の社殿にある木箱にしまって一日が終わります。この木箱には「天保七年　毎年三月牛頭天王御獅子厄除けのため十日邑回　多聞院住職秀誉」と書かれています。

現在は一軒一軒回ることもなくなり、氷川神社での祈祷の後、軽トラの荷台に獅子頭を載せ、各地区を回るだけになりました。　（平山由喜）

（写真は『写真集埼玉のまつり』高橋泰輔昭和５２発行より）

（『丸ヶ崎自治会ニュースブログ』にも獅子回りのことが掲載されています。）